

## ループスアンチコアグラントにより凝固検査結果が異常値となった1例

◎吉岡 翔<sup>1)</sup>、牧 優治<sup>1)</sup>、佐藤 亜耶<sup>1)</sup>、大久保 礼由<sup>1)</sup>、石塚 静江<sup>1)</sup>、菅原 新吾<sup>1)</sup>、藤巻 慎一<sup>1)</sup>  
東北大学病院<sup>1)</sup>

【はじめに】凝固因子欠乏やインヒビターの存在は、凝固時間を延長させ出血症状を引き起こす。凝固因子欠乏の代表的な疾患には血友病があり、インヒビターには凝固因子に対する抗体やループスアンチコアグラント(LA)がある。LAは血栓症の原因となり凝固時間を延長させる。今回血友病Bの診断を受けたのちLAの存在で凝固検査結果が異常値となった症例を経験したので報告する。

【症例】70代男性。血友病Bの診断を受け当院血液内科にてフォロー中であった。当院にて甲状腺癌と診断され術前検査でAPTTの延長を認め精査となった。出血傾向や血栓症の既往はない。術前検査では、PT 66.5%, APTT >180秒, FBG 450 mg/dL, FDP <2.5 µg/mL, D-dimer <0.5 µg/mLであった。APTT延長の原因検索のためクロスミキシング試験を実施した結果、即時・遅延反応ともに上に凸の波形となりLAが疑われた。凝固因子活性とインヒビターの測定結果は、第II因子 92%, 第V因子 104%, 第VII因子 94%, 第VIII因子 12%, 第IX因子 3%, 第X因子 79%, 第XI因子 4%, 第XII因子 1%, 第VIII因子インヒビター 1.1 BU/mL, 第

IX因子インヒビター 1.6 BU/mL, LA(dRVVT法) 3.5であった。凝固時間法ではLAによる凝固因子活性の偽低値とインヒビターの偽陽性が疑われ、合成基質法での凝固因子活性の測定とAPTTの希釈測定を実施した結果、凝固因子活性は第VIII因子 >144%, 第IX因子 95.5%, APTTは81.4秒に短縮した。

【考察】本症例では凝固因子活性が凝固時間法と合成基質法で乖離したことから、LAにより凝固因子活性が偽低値、インヒビターが偽陽性になったと考えられた。また血友病B診断時の第IX因子活性の測定は凝固時間法のみで、今回合成基質法による測定が追加された。これにより凝固因子の偽低値が明らかとなり、血友病Bは否定的である。以上から本症例のようにLAが測定に影響を与えている場合、合成基質法による凝固因子活性の測定が必要であると考えられる。

連絡先 022-717-7381